

文芸翻訳入門

- 2 はじめに
- 4 表記のルール／調べ物について
- 5 【1】問題・解説・訳例
- 11 【2】問題・解説・訳例
- 19 【3】問題・解説・訳例
- 25 リーディングとは
- 26 シノプシス作成で気をつけるべき点
- 28 *The Forever Year* (『父さんが言いたかったこと』) シノプシス
- 31 *Dissolution* (『チューダー王朝弁護士シャードレイク』) シノプシス

【付録】 *Dissolution* 生徒作成シノプシスの添削例

【はじめに】

この冊子は、文芸翻訳、特に小説の翻訳をやってみたい人のために、その基本を解説したものです。基本とは言っても、人によってはかなりむずかしいと感じる記述も含まれているかもしれません。

できれば、この冊子に取り組む前に、おもに文芸翻訳の初学者を対象として書いた拙著『日本人なら必ず悪訳する英文』（ディスカヴァー携書）を熟読してください。まったく未経験の人は、そちらで足慣らしをしてからのほうが取り組みやすいと思います。ただし、順序が逆になっても大きな支障はありません。

この冊子の前半は、3種類の英文と、それぞれの訳出にあたって注意すべきことの解説から成っています。かならず、まず自分の訳文を作ってから、解説とこちらの用意した訳文を読んでください。自分で訳さずに読んでも、ほとんど意味がありません。

後半は、出版翻訳の仕事の数分の1を占めると言ってよいリーディング（シノプシス作成）についての解説です。まず、リーディングの要領を簡単に説明したあと、シノプシスの実例をふたつ載せてあります。1番目の *The Forever Year*（訳書名『父さんが言いたかったこと』新潮社）については標準的なシノプシスだけを、2番目の *Dissolution*（訳書名『チューダー王朝弁護士シャードレイク』集英社）については、付録の形で生徒のシノプシスの添削例も紹介しました。原書を手に入れば訳書でもかまわないので、一読したうえで見てください。もちろん、自分でもシノプシスを書いてみるのがいちばんです。

さて、小説の翻訳をする際にまず心がけるべきことをいくつか書きます。わたしはよく著書や講演会などで、出版翻訳の仕事をするために最も必要な資質として、「日本語が好き」「調べ物が好き」「本が好き」の3つをあげます。それぞれを簡単に説明しましょう。

■日本語が好き

少なくとも英文和訳系の翻訳においては日本語が最終表現手段であるため、これに精通していなくてはならないのは当然のことです。わたし自身、翻訳の仕事をしている時間の半分以上、おそらく7割程度は日本語と格闘していますし、自分が提供する商品は日本語なのだから、まずは日本語のプロであるべきだという自覚があります。

さらに言えば、どんなに英語ができる人でも、母国語以上に深く理解しているとは考えにくいので、母国語の運用能力が貧しい人が外国語だけ飛び抜けてできるということはまずありえません。日本語の構造や語彙に精通しているからこそ、外国語との共通点や差異に対して敏感になれるのです。

■調べ物が好き

どんなに博覧強記の人でも、どんなに海外生活が長い人でも、英文に書かれているすべての

ことを一読して理解できるわけではありません。知らない固有名詞や成句は山ほど出てきます。中にはある程度想像がつくものもありますが、翻訳という形で他人に読ませるのであれば、中途半端なことはできません。もちろん、物知りであることは翻訳をするうえで強力な武器になりますが、自分の知識を過信して調べ物を面倒がっていると、仕事ではよく痛い目に遭います。わたし自身は修業時代も含めると 20 年ぐらい翻訳にかかわっていますが、いまでも 1 日に数百回は辞書を引きます。

逆に、辞書やインターネットであれこれ調べているうちに、ほかのことにも興味が湧いてきてどんどん脱線していくようになったら、むしろそれこそが理想です。翻訳の勉強には、単に英語の習得にとどまらず、さまざまな形で知識や視野を広めていく効果があります。

■本が好き

野球のことを知らないのにプロ野球の選手になりたい人はいませんから、小説の翻訳をするには、何よりもまず小説について熟知すべきなのが当然です。原書・訳書・日本人作家の作品の 3 種類すべてに日ごろから目を通していただきます。

ただひたすら英語の勉強を禁欲的につづけるのではなく、好きなもの、おもしろいものを楽しみながら読んでいけばよいわけですから、むしろ長続きしやすいはずです。

■そしてもちろん、英語も

必要な 3 つの資質のなかに「英語が好き」はありませんでしたが、英語を深く正確に読みとる能力が必要なのは言うまでもありません。単に読むだけではなく、あれこれ考えながら訳文を作ること、より深くより正確に読みとる力がついていくものです。

ですから、もう一度書きますが、かならず自分の訳文を作ってから、説明とわたしの訳文を見てください。漠然と読みながら意味を追っていけば、簡単に訳せる気になるものですが、実際に訳文を書いてみるとさまざまな壁に突きあたります。英語の読みとりでは、わかった気になっていて実はわかっていない、ということがしばしばありますが、訳文を作らずにそれを見抜くのは非常にむずかしいものです。

これからの時代、文芸翻訳だけで生活していける人は、プロのなかでもごく少数でしょう。しかし、文芸翻訳の勉強は知識、判断力、人生経験などを総動員して取り組むため、ほかの勉強ではぜったいに手に入れられない最高の喜びが得られます。簡単ではありませんが、楽しみながら、気長につづけてください。

越前敏弥

【表記のルール】（大人向けフィクションの場合）

- ・言うまでもなく、小説の訳文は縦書き。
- ・改行、段落替えなどは、原則として原文どおり。
- ・段落のはじめは1マスあける（全角スペース）。ただし、カギや括弧などではじまる場合はいちばん上から。また、章のはじめなどで、原文が左詰めで書かれていても、訳文は1マスあける。
- ・段落中の疑問符（?）、感嘆符（!）のあとは1マスあける。
- ・カギや括弧などを閉じる直前には句点をつけない。〈例〉「さようなら」
- ・ダッシュ（——）と三点リーダー（……）は、原文でよほど長くなっていないかぎり、ともに2マス扱い。——のかわりに―、〈〉のかわりに< >、……のかわりに・・・や：：など、キーボード上の記号で安易にごまかさないこと。
- ・何を漢字で書き、何をかなで書くかは各自の判断によるが、自分なりにルールを決める。
- ・数字は原則として漢数字。ただし例外もいくつかある。
- ・度量衡は原則として原語のままだが、温度だけは例外。もっとも、最近はメートルやグラムに直す翻訳者も徐々に増えている。
- ・本の題名は『 』でくくる。映画・音楽・店などについては自分なりにルールを決める。

【調べ物について】

できればCDをハードディスクにコピーして、Jamming や Logophile などの検索ソフトで串刺し検索できる環境を作ってください（「串刺し検索」の意味がわからない人は自分で調べてください）。最低でも、大型の英和辞典と国語辞典、類語辞典がひとつずつ必要です。これらは徐々にそろえればよいのですが、これから購入する場合は紙の辞書ではなく、可能なかぎりCD版かオンライン辞書を選ぶべきです。

また、インターネットですぐにさまざまな検索をできるような環境にしてください。

【 1 】

イギリスの小説です。Maurice(50歳)とCharlie(36歳)は兄妹で、Beatrixはふたりの伯母にあたります。またMrs. MentiplyはBeatrixの家政婦です。

‘Hello?’

‘Charlie? This is Maurice.’

‘Maurice? What a lovely surprise. How — ’

‘Not lovely at all, old girl. I’ve got bad news. It’s Beatrix.’

‘Beatrix? What — ’

‘Dead, I’m afraid. Mrs Mentiply found her at the cottage this afternoon.’

‘Oh, God. What was it? Her heart?’

‘No. Nothing like that. It seems . . . According to Mrs Mentiply, there’d been a break-in. Beatrix had been . . . well . . . done to death. I don’t have any details. The police will be there now, I imagine. I’m going straight down. The thing is . . . Do you want me to pick you up on the way?’

‘Yes. All right. Yes, perhaps you could. Maurice — ’

‘I’m sorry, Charlie, really I am. You were fond of her. We all were. But you especially. She’d had a good innings, but this is . . . this is a God-awful way to have gone.’

‘She was murdered?’

‘In the furtherance of theft, I suppose. Isn’t that how the police phrase it?’

‘Theft?’

‘Mrs Mentiply said there were things taken. But let’s not jump the gun. Let’s get there and find out exactly what happened.’

‘Maurice — ’

‘Yes?’

‘How was she killed?’

‘According to Mrs Mentiply . . . Look, let’s leave it, shall we? We’ll know soon enough.’

‘All right.’

‘I’ll be with you as soon as I can.’

‘OK.’

‘Have a stiff drink or something, eh? It’ll help, believe me.’

‘Perhaps you’re right.’

‘I am. Now, I’d better get on the road. See you soon.’

‘Drive carefully.’

‘I will. Bye.’

‘Good bye.’

【1】解説

ロバート・ゴダード『鉄の絆』（創元推理文庫、原題 *Hand in Glove*）の一節です。厳密に言うと、Beatrix はふたりの伯母ではなく、もう少し複雑な血縁関係があるのですが、ここでは伯母と考えても差し支えないので、そのつもりで話を進めていきます。

ざっと読んで、電話でのやりとりだとわかったと思います。会話のやりとりなのでそれらしく訳す、というのは当然ですが、その前に、最初の問題でもあることですし、表記などに関する重要事項をいくつか説明します。

4 ページに表記のルールをまとめましたが、みなさんの作った訳文は、それをすべて守っているでしょうか。このルールは、翻訳のクラスでは、最初に全員に説明するか、少なくとも資料として配付するかもしれませんが、そのつぎの回にこの問題を扱うと、3分の1から半分ぐらいの人がそのルールを守らない訳文を書いてきます。

いちばん無視する人が多いのは、4 番目の「段落中の疑問符（?）、感嘆符（!）のあとには1マスあける」です。1マスあけない人や、逆に段落中でないのに（この問題で言えば、台詞の終わりなのに）1マスあける人がずいぶんいます。

つぎに多いのが、5 番目の「カギや括弧などを閉じる直前には句点をつけない」。たしかに、子供のころには、カギの前に句点を書くように学校で教わっていたでしょうが、いまふつうに世の中に出まわっている刊行物はどうなっているのでしょうか。子供向けのものは別とすると、翻訳書であれ日本の作者のものであれ、ほとんどがカギの前に句点を入れていないはずで、であれば、それに従うのが当然です。

3 番目の第2文「ただし、カギや括弧などではじまる場合はいちばん上から」を守らずに、全部1マスあける人もずいぶんいます。一部の出版社や新聞社で、1マスあけるのをルールとしているところもたしかにあります。大部分はあけずにいちばん上でそろえているはずで、

ところで、この問題の最初の行の‘Hello?’ がほかの行に比べて左に寄っているのに気づいたでしょうか。これは誤入力ではありません。ここは、先ほどの3番目のルールの第3文「章のはじめなどで、原文が左詰めでも書かれていても、訳文は1マスあける」に該当します。英文では、段落のはじめは日本語と同じようにある程度のスペース（インデントとも言います）を入れますが、章のはじめや1行空きのあとはスペースを入れずに左寄せにするのがふつうです。しかし、日本語にはそういうルールがないので、ほかの段落（この問題の場合はほかの台詞）と同じ位置からはじめてかまいません。

もうひとつ、6 番目のダッシュ（——）と三点リーダー（……）についても、2マスにしない人が少なくありません。これについては、単に表記だけでなく、この英文の場合は読みとりの深いところにまで及ぶ問題なので、あとでくわしく説明します。

同業の翻訳者で、コンクールやトライアルの採点・講評を引き受ける人がかなりいますが、みな口をそろえて「なぜあんなに表記のルールを守らない答案が多いのか」と嘆きます。そんな細かいことはどうでもいいじゃないかと思われるかもしれませんが、実のところ、表記のルールは守っていないけれど非常にうまい翻訳、などというものはいまだかつて一度も見たことがありません。というのも、ここまであげた表記のルールは、本をある

程度読んでいる人、特に翻訳書を多く読んでいる人なら、まったく言わずもがなのことばかりだからです。ふつうに出版されている翻訳書と同じように書けばいいのですから。逆に言えば、そのルールを守っていない人はろくに翻訳書を読んだことがないのが明らかで、そんな人にすぐれた翻訳ができるはずがないので、審査する側もそれだけで自信を持って落とすことができるわけです。

最初から小言のようなことばかり書いてしまいました。これはとても大事な問題なので、注意してください。

さて、つぎに固有名詞の発音の話。

Maurice、Charlie、Beatrix、Mrs. Mentiply の4人の名前が出てきますね。「モーリス」と「チャーリー」は問題ないでしょう。ちなみにCharlieはCharlesという男性の愛称であることが多いのですが、Charlotteという女性の愛称でもあります。

Beatrixについては、ベアトリックス、ビアトリックス、ベアトリクス、ビアトリクスのどれでもかまいません。おそらく原音に近いのは「ビ」ではじまるほうでしょうが、「ベ」ではじまる表記もよく見られます。

問題はMentiplyで、これはどの辞書にも載っていないと思います。メンティプリーなのか、メンティプライなのか、どちらでしょうか。

こういうとき、決定的な方法というものはないので、あの手この手で調べることになります。

まずは、数年前からいくつかできた発音サイトを使うこと。綴りを入れれば機械的に発音してくれます。イギリス式とアメリカ式を選べるサイトもあります。

あるいは、オーディオブックが出ている場合は、それで該当箇所を聞くこと。これは機械ではなく人間がしゃべっています。

信頼できるネイティブに尋ねるという手もあります。これはイギリスの小説なので、イギリス人のほうがいいかもしれません。

ただ、どの方法にしても絶対ではありません。そもそも、大辞典に載っていないような固有名詞の発音は、人によって、あるいは地域によってちがう読み方をする場合が多いのです。

そしてもうひとつは、正確にどう発音するかは別として、日本でどう表記されているかを調べること。たとえば、検索エンジンに「メンティプリー」と「メンティプライ」の両方を入力して、ヒット数を比較します。その場合、大事なのはヒット数だけでなく、どの程度信頼できるサイトでそう記されているかも考慮しなくてはなりません。

今回の場合、上にあげたすべての方法を試したところ、どれも「メンティプリー」が優勢だったので、訳例ではそちらを選んでいきます。

もちろん、そんなふうに一方向的に決まらない場合はよくありますが、そういうときもどこかで見切り発車しなくてはなりません。ただ、いくつかの方法で裏をとってあれば、仮にクレームがついたような場合も、根拠を示せます。どのみち完璧にはならないのですから、現実問題としてはそこまでやってあげればじゅうぶんです。

さて、つぎに、先ほど少しだけふれたダッシュ（——）と三点リーダー（……）の問題を考えてみます。原文では「—」と「. . .」ですが、日本語ではそんなふうには2マスを使っ

て表記するのがふつう、ということでしたね。

ところで、これは英語でも日本語でも同じですが、そもそも「—」と「. . .」(あるいは「——」と「……」)はどのように使い分けられるものでしょうか。そう、

—— は、何か言おうとしたのを相手にさえぎられたとき。

…… は、自分自身で迷ったりして言いよどんでいるとき。

というちがいがありますね。この英文には「—」が4回、「. . .」が6回出てきますが、すべてそれに該当するのがわかるでしょうか。作家によっては、あまり厳密に使い分けない人もいますが、この小説の書き手はしっかり区別して使っています。

そして、よく見ると、4回の「—」はすべてチャーリーの台詞の終わりにあり、チャーリーが何か言おうとするのをモーリスがさえぎっています。一方、6回の「. . .」はすべてモーリスの台詞の途中にあり、モーリスがひどくしゃべりづらそうにしているのがわかります。

さて、これはモーリスがチャーリーに伯母の死を電話で伝える場面ですが、どうやら自然死ではないらしいと読者もだんだんわかってきます。いったい何が起こったのかとチャーリーが問いつめようとするのに対し、モーリスはそれを再三さえぎり、奥歯に物のはさまったような話し方をして、なかなかはっきりとは答えません。9行目で "Beatrix had been . . . well . . . done to death." と言っているのが、その最たるものでしょう。ここをどう訳すかが非常にむずかしい。done to death は「死に至らしめられた」という感じですが、会話のなかでそんなことを言うのはいかにも変ですから、もう少し砕けた表現にしたいところです。しかし、なかなかぴったりの言い方を思いつかないかもしれません。

ただ、どう訳してはいけないかだけははっきりしています。ここでモーリスが口にせずにいることばはなんのでしょうか？ そう、killed あるいは murdered です。ずっと年下の妹チャーリーを傷つけないからでしょうが、このあともさらにまわりくどい話し方に終始しています。そして、さらにまわりくどく a God-awful way to have gone と言ったところで、苛立ったチャーリーがついに単刀直入に "She was murdered?" と尋ねるわけです。その7行下に killed が出てきますが、これもチャーリーの台詞です。モーリスは最後の最後まで、はぐらかすような受け答えをつづけています。

以上から考えて、done to death の訳としては、「殺された」「殺害された」が最もよくないとわかりました。あとは、それと似た意味のなるべく遠まわしな表現を、時間をかけて探してください。「人の手にかかった」などが出てくればよいのですが、初学者の段階では、「殺された」がいちばんまずいことに気づいていればじゅうぶんです。

この英文は、全体としてはさほどむずかしくないのですが、翻訳の勉強の第一歩として、上記のような深い読みとりが大事であることを知ってもらうために選びました。

以下は、まちがいが多かったり表現上の工夫が必要だったりの個所について、一気に説明します。

4行目の **old girl** は妹に対する親愛をこめた呼びかけにすぎないので、特に訳出する必要はありません。無理に日本語をあてようとしても珍妙に浮くだけです。

6行目の **cottage** は、イギリスでは要するに（テラスハウスやフラットなどではない）ふつうの一軒家を指す場合が多いことばです。ここだけでは断定できませんが、「別荘」ではない場合がほとんどですし、「コテージ」では山小屋のようなものを連想してしまいます。

10行目の **going straight down** を「直行する」と訳す人がいますが、ここでは不適當です。というのも、そのすぐあとで、チャーリーの家へ寄ってもよい、つまり直行しなくてもいい、と言っているからで、それではつじつまが合いません。この **straight** の意味は「まっすぐ」ではなく「すぐに」です。

13行目の **I'm sorry** は、ここでモーリスが謝る理由がないので、「ごめん」ではなく「気の毒に」などと訳すべきです。

14行目の **had a good innings** の処理がちょっとむずかしい。辞書には「天寿を全うする」「長生きする」「幸せに生きる」などとありますが、まず「天寿を全うする」は、殺されたのですからまったく矛盾する言い方です。残りのふたつは変ではないものの、あとの「こんなひどい亡くなり方をするなんて」にいちばんうまくつながるのは、「たしかにもういい歳だったけど」のように「いつ死んでもおかしくない」という含みが少しある言いまわしではないでしょうか。

16行目の **In the furtherance of theft** も厄介です。文字通り言うと「盗みを促進するために」で、盗みにはいったのを気づかれたか邪魔されたので殺した、ということです。ただ、このあとで「警察ならそんなふう言うんじゃないか」と言っているのだから、いかにも警察の使いそうなことば、あるいは法廷用語っぽい響きのあることばが望ましいことになります。ただし、モーリスは法律や捜査の専門家ではないのですから、正確な法律用語でなくてもかまいません。

わたし自身は、意味を重んじて、「窃盗の目的を全うするために」というかなり堅苦しい響きのある訳にしてみました。が、「強盗致死」などの訳語も、完全にこの英語どおりではないものの、ここでは悪くないと思います。

そのあとは、さほど処理に困るところはなさそうです。強いて言えば、下から6行目の **a stiff drink** は、「強い酒」にはちがいないのですが、ここは少量のブランデーか何かを口にして心を落ち着かせるという趣旨ですから、「気つけ」ということばがベストです。「強い酒」だと、なんだか酔ってふらついてしまいそうな感じがします。

ほかの部分についても、ゆっくり訳文を突き合わせてみてください。

【訳例】

「もしもし」

「チャーリー？ モーリスだ」

「モーリスですって？ びっくりさせてくれるわね。元気で——」

「それが、いい話じゃない。悪い知らせなんだ。ベアトリックスのことだよ」

「ベアトリックス？ いったい——」

「亡くなった。きょうの午後、ミセス・メンティプリーが家へ行ってわかった」

「信じられない。原因は何？ 心臓？」

「いや、ちがうんだ。どうも……ミセス・メンティプリーの話だと、何者かが押し入ったらしい。ベアトリックスは……つまり……人の手にかかったんだ。くわしいことはわからない。たぶん、警察が着いているころだと思う。わたしはすぐに出るつもりなんだが……いっしょに乗っていかないか」

「ええ、そうね。お願いするわ。モーリス——」

「チャーリー、さぞつらいだろう。きみはベアトリックスが大好きだったからな。もちろんみんなが好意を持っていたが、きみは別格だった。たしかに高齢だったけど、こんな……こんなむごい死に方をするなんて」

「殺されたってこと？」

「窃盗の目的を全うするために。警察ならそんな言い方をするだろうな」

「窃盗？」

「ミセス・メンティプリーが言うには、盗まれたものがあるそうだ。しかし先走りはやめよう。

実際に向いて、この目でたしかめたい」

「モーリス——」

「なんだね」

「どんな殺され方だったの？」

「ミセス・メンティプリーは……いや、やめておこう。すぐにわかることだ」

「そうね」

「できるだけ早くそっちへ行く」

「わかったわ」

「何か気つけになるものを飲んでおくといい。きっと役に立つから」

「そうかもしれないわね」

「請け合うよ。さあ、そろそろ出たほうがいいな。それじゃ、あとで」

「気をつけて来て」

「ああ。じゃあ、また」

「じゃあね」

【 2 】

『ダ・ヴィンチ・コード』のパロディ本 *The Da Vinci Cod* の冒頭部分です。

Jacques Sauna-Lurker lay dead in the main hallway of the National Art Gallery of Fine Paintings, in the heart of London, a British city, the capital of Britain, with a population density of approximately 10,500 people per square mile and a total population of approximately seven million people, unless by 'London' you include the Greater London Area, which has a population of about twenty million people and a slightly lower population density per square mile.

The National Gallery of London is one of the most beautiful of the many Art Galleries and Museums in London, and Jacques Sauna-Lurker had been curator of its many beautiful paintings and valuable sculptures for twelve years. He was a well-known and widely admired man, a great scholar, and a friend to the arts.

But now he had been brutally slain. A three-foot-long codfish had been inserted forcefully into his gullet, blocking both oesophageal and tracheal tubes.

This was no ordinary murder.

【2】解説

The Da Vinci Code が刊行されたのは2003年3月（日本でわたしの訳書が出たのは2004年5月）です。ベストセラーの宿命で、関連本や批判本が多数出されましたが、中でもこの *The Da Vinci Cod* はきわめて異色のもので、当時はかなり話題になったものの、日本で翻訳刊行されることはありませんでした。

作者の名は Don Brine（ドン・ブライン）。もちろん、Dan Brown に似せた名前なのですが、音が似ているだけでなく、cod（タラ）に合わせて brine（海水）という語を選んでいきます。ちなみに、この本の表紙には "NOT THE #1 NEW YORK TIMES BESTSELLER" とあり、さらに fishy parody という文字が見えます。fishy には「魚っぽい」だけでなく、「いかがわしい」という意味もあります。

こんなばかげた本を書いた人の正体が気になる場所ですが、Don Brine は本名が Adam Roberts というロンドン大学の教授で、19世紀英文学と創作を専門としているそうです。詩やSFなどの研究書を多く著す一方、さまざまな筆名を使い分け、*The Soddit*（『ホビットの冒険』のパロディ）、*Star Warped*（映画〈スター・ウォーズ〉のパロディ）、*I Am Scrooge: A Zombie Story For Christmas*（『クリスマス・キャロル』のゾンビ版パロディ）などを書いています。

この箇所は、『ダ・ヴィンチ・コード』の冒頭、ルーヴル美術館でジャック・ソニエール（Jacques Sauniere）という人物の全裸死体が発見される場面を下敷きにしています。Jacques Sauna-Lurker というのは、むしろこの人物を意識してつけられた名前でしょう。訳文ではこれをどう処理すればいいでしょうか。

単純に発音どおり表記すれば、「ジャック・サウナ-ラーカー」あたりでしょう。ただ、この作品はくだらない親父ギャグ満載のC級パロディ本であり、そういう作品であることをしよっぱなから堂々と示す意味でも、ここでは大胆に冒険してみましよう。

作者がなぜこんな名前を選んだのか、正確なところはわかりません。単にソニエールに似せるだけなら、もっと音韻の近い名前を選ぶほうがよい気がします。Sauna（サウナ）と lurker（隠れる人）を組み合わせている意図ははっきりしないものの、どことなくいかがわしい響きがあるのはまちがいありません。また、元ネタのソニエールは死体が全裸で発見されるわけですから、裸を連想させる響きを持つ語を使ったのは偶然ではないと思います。

翻訳を勉強中の人たち数人にこれを訳してもらったところ、単に「ジャック・サウナ-ラーカー」とした人が半分ぐらいでしたが、おもしろいものとして、「ジャック・サウナニール」と「ジャック・スッポンポン・ダンマリール」という訳語がありました。前者は「サウナにいる」という意味を持たせつつ、ソニエールと似た響きにもなっている、なかなかすぐれた訳語です。後者は、裸であることや、なんとなく「むつつりスケベ」のようなニュアンスを出したかったようですが、少々悪乗りが過ぎるかもしれませんかもしれません。ただ、「サウナニール」では「サウナにいる」の含意を読みとってもらえない可能性もあり、おふざけの意図が読者に伝わりにくいのに対し、後者はだれがどう読んでもばかばかしく感じるはずで、その意味でこのふたつの訳語は一長一短と言えるでしょう。

こういう部分の匙加減は非常にむずかしく、何年この仕事をしていても、自信を持ってこれ

が最良の訳だと提示することはできません。笑いのツボは人それぞれ個人差があるものですし、翻訳においてはそれに加えて、原著者の意図がどんなものかと推し量ったり、わかりやすさと味わいのどちらを重んじるべきかなどという問題も付きまといまいます。大げさに訳したほうが笑える場合もあるし、逆に控えめのほうが笑いを引き出せる場合もあります。

わたし自身は、まず「サウナニカクレール」(サウナに隠れる)というのを考えましたが、いささか長くて切れが悪いのと、もう少し「ソニエール」に近い響きにしたほうがよいという判断から、これについての連載記事を書いていたときには「サウナデネール」(サウナで寝る)にしてみました。いまは、少々切れが悪くても一読してばかげたパロディだとわかる「サウナニカクレール」のほうがやはりよいのではないかと感じているので、この冊子ではそちらで通すことにします。

なお、Sauna-Lurker のように名前がハイフンでつながれているのは、一般には結婚などの理由でふたつの苗字を連結させるという意味合いになることが多いのですが、そのような例は高貴な家柄の人間である場合が少なくないこともあって、いかにも上流階級っぽいニュアンスが感じとれます。わたしが以前訳したイギリスの小説には、ふつうのひとつだけの苗字なのに、あえてそのあとにハイフンつきの偽名を添えて箔をつけようとしている骨董品商が登場しました。Sauna-Lurker にもそんな響きがあるので、意味のうさんくささとのアンバランスゆえの珍妙な響きがあります。

このハイフンを日本語にする場合は、そのままハイフンにするか、「=」でつなぐかのどちらかで、「・」とは使い分けるのがふつうです。もっとも、今回の場合は「スッポンポン」がどうのこうのという話ですから、その点にあまりこだわる必要はありません。

Jacques Sauna-Lurker の話は以上。さて、あらためて英文を見てみると、第1段落がずいぶん長いにもかかわらず、センテンスはたったひとつであることに気づきます。こういう場合の処理はどうすればいいのでしょうか。長いセンテンスを訳出するときには、つねに目標とすべきことがふたつあります。

第1の目標は、なるべく英文の流れに沿って訳すことです。英文には、いつ、だれが、どこで、何をしたというような具体的な情報が左から右へ、上から下へと並べられているわけですが、英語を母国語とするネイティブは、当然ながらその情報を英文の順序どおりに頭に入れていきます。その思考の流れに可能なかぎり忠実に従って、それを反映させるのがよい翻訳だと言えるでしょう。ネイティブと同じ順序で日本人が情報を取りこめるような訳文を作るのが目標だということです。

第2の目標は、センテンスの切れ目を変えないことです。長い文を短く切れば、訳しやすいし、そのうえわかりやすい日本語になるのはたしかですが、そうすることによって、原文の持つ味わいや歯応えは確実に失われます。小説の書き手のなかには、マルセル・ブルーストのように1文がものすごく長い作家もいれば、ジェイムズ・エルロイのように極端に短い文を積み重ねていく作家もいます。翻訳作業を通じて日本人の読者に伝えるべきものは、表面的な意味だけではありません。文体もまた同じくらい重要であり、それを忠実に反映させるためには、原則としてセンテンスの切れ目を変えないよう、ぎりぎりまで努力すべきです。

とはいえ、ふたつの目標を同時に達成するのは至難の業です。そもそも、このふたつは矛盾しているとさえ言えるでしょう。英文の流れに沿おうとすれば、いくつかの文に分けて訳さざるをえない場合は多いですし、逆に、なんとしても1文のままを保とうとすれば、前後をひっくり返して訳すほかに方法がないこともしばしばあります。

それでもなお、一見相反するふたつの目標をどうにかして同時に実現していく、あるいは、かぎりなくそれに近づけていくのが小説の翻訳者のつとめであり、また、それを実現できた訳文こそが最もすぐれたものだと言えるでしょう。

現実には、ふたつを100パーセント同時に成り立たせることが不可能なことも多く、そういう場合は、どちらを優先させるべきかをよく考えて、妥協したり、あるいは一方を完全に切り捨てたりという決断をすることになります。では、第1段落の英文では、どちらを優先すべきなのでしょうか。

その前に、この英文に盛りこまれた情報を、書かれている順にまとめてみましょう。この文のなかには、大きく分けて4つの情報が含まれています。

- (1) Jack Sauna-Lurker の死体が National Art Gallery の通路に横たわっていた。
- (2) National Art Gallery があるのはイギリスの首都ロンドン。
- (3) ロンドンの人口密度と総人口。
- (4) Greater London の人口と人口密度。

この4つを並べてみて気づくのは、小さな内容から大きな内容へと徐々に話がひろがっていることです。美術館の通路の光景からはじまって、美術館のある都市ロンドンの説明がされ、さらに Greater London (the City of London と周辺の自治区 borough からなる地域) の話へ移っていきます。これは明らかな意図があってこういう流れになっていると察せられるので、訳文においても4つの情報をなんとしてもこの順序で提示したい。だとしたら、第1の目標を優先し、センテンスの数については、さすがに4つではまずいですが、2つぐらいまでならよしとすべきでしょう。

また、前にも書いたとおり、この部分は『ダ・ヴィンチ・コード』の冒頭部分の完全なパロディになっています。英文の読者の多くは、Jacques Sauna-Lurker という名前を見ただけで、すぐ『ダ・ヴィンチ・コード』の Jacques Sauniere を思い浮かべるでしょうし、さらには、つぎの lay dead を見ただけで、ああ、ソニエールも大の字の恰好で横たわっていたんだっとな、と瞬時にして連想するはず。それと同じ効果を日本語でも狙うなら、訳文でも、サウナニカクレールの名前と、死体があったという事実をなるべく早く提示したい。だとしたら、はじめりはなんとしても「ジャック・サウナニカクレール」であるべきですし、さらに言えば、「ジャック・サウナニカクレールは〜で死んでいた」とやるよりも「ジャック・サウナニカクレールの死体が横たわっていたのは〜だった」とやるほうが望ましい。そのほうが、この作品の読者(多くは『ダ・ヴィンチ・コード』の読者でもあります)に対して親切だからです。

もうひとつ、ここで考えたいのは、この段落に記されている蘊蓄のばかばかしさ、あるいはくだらなさです。本家の『ダ・ヴィンチ・コード』では、スピード感を損なわない程度に、読

者が興味を持ちそうな驚くべき豆知識を文脈に即してうまく織りこんでありますが、この段落にあるロンドンの話は、はっきり言ってどうでもよい、へなちょこ蘊蓄です。このへなちょこぶりをなるべくそのまま伝えるためにも、小から大へという流れは忠実に守りたい。くだらなさを増幅させるために、あえてたどたどしい日本語でつなぐという手もあるかもしれませんが、それを読者に感じとってもらうのは非常にむずかしいです。むしろ、淡々と、あえてくそまじめに語ることによってこそ、逆にいわく言いがたいユーモアが生まれるのではないのでしょうか。

以上のことから、わたし自身の訳では、4つの情報のうちの1番目だけをまず1文で訳し、残り3つを第2文にまとめるという形にしました。おそらく、これがいちばん処理しやすい方法でしょう。

最初の英文を流れに沿って訳していく場合、いちばん処理がむずかしいのは **unless** ではじまる節でしょう。**unless** は "if ~ not" という意味で、通常は「もし～でなければ」などと訳されますが、短い文ならともかく、今回のような長い文になると、その訳し方では非常にわかりにくくなります。では、どうすればいいのか。

たとえば、"You will hurt yourself unless you take care." は「注意しないと怪我するよ」と訳するのがふつうですが、英文の流れどおりに考えれば、「怪我するよ、注意すれば別だけど」のようにも訳せますし、状況によっては「怪我するから注意なさい」や「怪我しないように注意なさい」でもいいかもしれません。

この英文では、まず通常のロンドンの人口と人口密度について語ったあとで、「でも、ロンドンと言っても、Greater London を入れれば話は別だよ」と付け加えている感じがしますから、「ロンドンとは～だが、一方、グレーター・ロンドンとは～」という流れに訳すほうが、訳文が読みやすいのはもちろんのこと、むしろ原文の流れを忠実に伝えることにもなります。わたしの訳文は、そんなことを考えて作りました。

なお、原文は **include the Greater London area** となっていますが、**Greater London** は周辺領域だけではなく **City of London** 全体を表すことばですから、訳文はそれを踏まえたものにしてあります。また、ここに書かれている数値はかなりいいかげんなものですが、おふざけ本なので神経質になる必要はないと考え、そのままにしてあります。

第2文以降では、場所と人物がややくわしく説明され、さらに殺害の状況がビジュアルに描写されています——なんて、くそまじめに書きましたが、なんとぼかげた光景でしょうか。タイトルにもある **codfish** (タラ) がここではじめて登場します。

このくだらなさをどの程度笑えるかどうかはさておき、訳すという立場で言うと、第1文のようにやたらと長かったり **unless** の処理がむずかしかったりということはなく、訳出はしやすいはずです。第2段落がやや長いとはいえ、「ナショナル・ギャラリーは～であり、ジャック・サウナニカクレールは～だった」というストレートな文なので、特に大きなくふうは要りません。第3段落以降も、「～は～だ」や「～は～で、～だった」という直線的な訳文がごく自然に頭に浮かびます。では、このような個所でいちばん気をつけるべきことはなんのでしょうか。

たとえば、こんな2つの文を考えてみてください。

John is a high school student. He has a lot of friends.

ふつうの英文和訳では「ジョンは高校生だ。彼はたくさん友達を持っている」などと訳すでしょう。あるいは、「友達を持っている」はややぎこちないので「彼には友達がたくさんいる」などとするかもしれませんね。

もちろん、英語のテストならそれで満点ですが、小説の翻訳では、それでは不十分、というか、冗長に感じられます。みなさんがごくふつうに生活しているなかで「ジョンは高校生だ。彼には友達がたくさんいる」などと言うのでしょうか。たぶんそうではなく、たとえば「ジョンは高校生だ。たくさん友達がいる」と言うはずですよ。2文目もジョンの話をしているのは明らかですから、わざわざ「彼は」や「彼には」などと言う必要はありません。

これは英語と日本語の最も大きな差異なので、翻訳の勉強をはじめた人は、何よりもまずこのことを頭に叩きこんでください。英語は原則としてどんな文にも主語が必要ですが（もちろん、命令文などの例外はあります）、日本語では、いったん主語が決まったら、そのあとは、同じ人物の話がつづくかぎり、わざわざ主語を立てないほうがむしろわかりやすいのです。

さらに言えば、he や him をなんでもかんでも「彼」と訳するのはいかにもぎこちない処理です。日本語には「彼」を表すことばとして「そいつ」「その男」「やつ」「野郎」「此奴」「やっこさん」などなど、無数と言ってよいほど多様な表現があるのですから、その場にふさわしいことばを選べばいい。英語には主格や目的格などががちりあって、代名詞のルールも明確に決まっていますが、日本語はそのあたりのルールが異なるので、それをうまく利用していくだけでも豊かな表現を使えます。逆に言うと、いろいろな使い分けができなければ、日本語として読むに堪えない貧弱な文章にしかならないのです。

そもそも主語が必要なのかどうかなどのルールについては、わたしは文法学者ではないので厳密な差異の説明はできませんが、翻訳における基本的なルールとして、つぎの2つをあげておきます。このルールはずっと覚えておいてください。

- (1) 英語で同一の主語がつづいているときは、日本語では原則として最初に一度主語を立てるだけでよい。
- (2) むやみに「彼」や「彼女」を使わない。

さて、上記のルールに従って第2段落以降を訳すとしたら、最初の文の主語は、前半が National Gallery で後半が Jacques Sauna-Lurker。もちろんここは主語を立てる必要がありますが、つぎの文の he はまた Sauna-Lurker ですから、訳文では主語が不要です。

さらに、第3段落1文目についても、段落は変わっているものの、やはり主語は he のままですから、ここも訳文では主語を抜くほうが日本語として自然です。つぎの文は A three-foot-long codfish、第4段落は This が主語なので、ここは訳文でもあらためて主語を立てる必要があります（ただし、5文目では「これは」を抜く手もあります）。あとに示したわた

しの訳例を参照してください。

第2段落以降で、主語の問題のほかに気をつけるべきことをいくつか並べておきます。

1行目の the National Gallery of London は、第1段落では the National Art Gallery of Fine Paintings と表記されていました。実は、このあとで London Gallery of Fine Paintings と呼ばれる個所もあり、統一されていません。こういう場合は正式名称をしっかりと調べて訳文ではそれなりに統一するのが原則で、ロンドンに実在するのは The National Gallery なので、わたしの訳文では「ナショナル・ギャラリー」でそろえてあります。ただし、何度も言いますが、おふざけ本ですから、今回はそのあたりにはこだわらなくてかまいません。

そのつぎの "one of the most beautiful ..." ですが、英語ではこういう言い方を非常によくするものの、いかにも英語が透けて見える翻訳調の表現なので、毎回「最も～であるもののひとつ」と訳すのはどうかと思います。「有数の」「屈指の」「図抜けて」など、意味の近い表現を適宜使い分けていくと、単調さを避けることができます。

2行目の curator の訳は、なかなかむずかしい。辞書を引くといろいろな訳語がありますが、この場にふさわしそうなのは「館長」「学芸員」のどちらかです。curator というのは美術館などにどんな作品を置くかを選定したり、それらの作品を管理したりする総責任者なので、かならずしも「館長」ではなく、「主任学芸員」などの訳語がふさわしい場合もあります。『ダ・ヴィンチ・コード』のジャック・ソニエールも curator でしたが、全編を通して読んでも、館長なのか主任学芸員なのかを判定できる決定的な根拠がなかったので、重鎮が殺されたという衝撃の大きさを考えて「館長」と訳しました。今回のサウナニカクレールもそれにそろえたわけですが、"curator of ..." のところはちょっと訳出のくふうが必要です。わたしの訳はその一例で、生徒の訳でうまくいったものとしては「～を管理する館長」「～を所蔵する美術館の館長」「館長として～を見守ってきた」などがありました。

この作品は日本では未訳のままなので、つづきを読みたい人は原書を入手してください。ペーパーバックで180ページ程度で、1ページあたりの文字数も少ないので、さほど負担にならないはずです。

【訳例】

ジャック・サウナニカクレールの死体が横たわっていたのは、ロンドン中心部にあるナショナル・ギャラリーの中央通路だった。ロンドンはいギリスの都市、同国の首都であり、一平方マイルあたりの人口密度はおよそ一万五百人、総人口はおよそ七百万人だが、ここでいう“ロンドン”をグレーター・ロンドン全域と見なすなら、人口はおよそ二千万人で、一平方マイルあたりの人口密度はわずかに低くなる。

ナショナル・ギャラリーはロンドンにあるあまたの美術館や博物館のなかでも有数の美しさを誇るが、ジャック・サウナニカクレールはここで十二年にわたって館長をつとめ、数多くのみごとな絵画や貴重な彫刻作品を管理してきた。広く尊敬を集める著名人であり、すぐれた研究者であるとともに芸術の友でもあった。

だが、いまやむごたらしく殺害されていた。喉に体長三フィートもあるタラが力づくで押しこまれ、食道と気管の両方がふさがれている。

これは尋常な殺人ではない。

【 3 】

近未来の話です。過去の大学入試問題から採ったもので、出典は不明です。

One day the World Science Council sent me on a mission on Time Machine MV 20-64 into the past of a certain small country. I have no right to tell you its name or location. We shall therefore call it Yonia. I was sent there at the request of the Prime Minister of Yonia, who desperately needed help.

However, as soon as I arrived, I realized that no one could help Yonia because it was ruled by a king, whose name must also remain secret. Let us call him Alfonse.

And to give a true idea of what Alfonse was like, I can say that if he had been at the head of the wealthiest nation he would have turned it into one of the poorest countries in the world.

Yonia's worst problem was not that the king spent more money than he had, nor was it that he permitted himself things that should never be permitted to anyone, or forbade others things that should never be forbidden. No, the most dangerous thing for the country was the king's ideas on how to raise his kingdom to everlasting greatness. Alfonse carried a big stick without sparing himself, not to speak of his subjects, for the good of Yonia.

If the young king had an idea on Monday, the idea was law on Tuesday. On Wednesday, the law was enforced, and on Thursday, the heads of lawbreakers were flying right and left.

After a month or two, the new law would somehow fade away, but by then a still newer law would have been proclaimed. As they said in Yonia, "All you need is a law, and there will never be a lack of lawbreakers."

Of course, the king never consulted anyone when he made his plans. True, he was surrounded by counsellors and sages. But in Yonia counsellors earned their title only by listening to the king's counsel, and sages, by nodding sagely every time the king spoke.

【3】

SFっぽい書き出しの文章ですが、科学に関する特殊な知識などはまったく必要ありません。そういうことよりもむしろ、後半のいささか意地の悪い、クールでユーモラスな書きっぷりをしっかり読みとって、その味わいをなるべくそのまま日本語で伝えることが必要になります。けれども、意外にそれがむずかしい。

この問題では、ある生徒の訳を見ながら、段落ごとにコメントしていきます。

《第1段落・ある生徒の訳》

かつて、ワールドサイエンスカウンシルによって任務を与えられたわたしは、タイムマシン MV 20 - 64 に乗って過去へ移動し、ある小国へと派遣されるようになった。国の名称や位置を言うことはできない。そのためこの国をヨニアと呼ぶことにしよう。わたしは必死に助けを求めているヨニアの首相からの要請に応じて派遣されたのだった。

第1文は、World Science Council を主語にしたままで処理しても、生徒訳のように「わたし」を主語にして書き換えても、どちらでもいいでしょう。ただ、「ワールドサイエンスカウンシル」ではいかにも読みにくく、「ワールド・サイエンス・カウンシル」と切れ目を入れるか、「世界科学協議会」などと日本語にするか、どちらかにすべきです。また、文末の「ようになった」の意味があいまいな感じがするので、「ある小国へと派遣された」でじゅうぶんです。

第2文では "have no right to ~" が「言うことはできない」と訳されていますが、これでは許されていないのか、覚えていないのか、どちらの意味にもとれるので、単に「資格がない」とするほうが意味がはっきりします。

第3文は問題なし。「ヨニア」でも「ヨーニア」でもいいでしょう。

第4文は関係詞 who の前にカンマがあって、Prime Minister についての説明があとにつづいていますが、この長さなら、英文の順序どおりに訳さずにひっくり返しても不都合はありません。

《第2段落・ある生徒の訳》

けれども、到着してすぐに、王によって統治されているが故に誰もヨニアを救うことができないのだと悟った。この王の名もまた秘密にしておかなければならない。彼のことはアルフォンセと呼ぼう。

第1文の処理がかなりむずかしい。ここはひとつの訳文で処理することがほぼ不可能で、生徒訳がこれをふたつに分けていることには問題ありませんが、この訳を見ると、国王が統治していること、つまり王制であること自体が原因だと読みとれてしまいます。ふたつに切るのなら、やはり because の前が切れ目でしょうね。この国をだれも救えないと悟った、といったん言いきったあと、その理由を述べればいい。その際、王制であることではなく、国王そのものに原因があると読者に伝えることがいちばん大事で、そのために少々語順を変えたりことばを補ったりのはやむをえません。わたしは「原因はそこを統治する国王にあったのだが、その

名を明かすことも禁じられている」としました。

第2文は「彼のことはアルフォンセと呼ぼう」になっていますが、前問でも書いたように、この手の「彼」は翻訳ではほとんど省略すべきです。この場合は、「彼のことは」を削って、たとえば「仮に」などと冒頭につければじゅうぶんでしょう。また、人名なので断言はできませんが、Alfonse はふつうに英語読みすれば「アルフォンス」です。

《第3段落・ある生徒の訳》

アルフォンセが実際どういう人物かと言うと、仮に彼が最も豊かな国のリーダーだったとしたらその国を世界で最も貧しい国のひとつに変えてしまうのが彼だといえるだろう。

生徒訳は、読みとれていないわけではないでしょうが、なんだかくだいいですね。「実際どういう人物かと言うと」は「実像」などとまとめられますし、「彼」が使われている2か所も簡潔に表現できます。また、この if は「～としたら」ではなく、むしろ even if の意味、つまり「～としても」ととるほうが明確になりますね。これは最上級の表現とセットになってよく見られる用法です。また、1行目で「言う」と書いて、2行目の末尾で「いえるだろう」と結ぶのは無駄な言いまわしですし、漢字で書くのかひらがなで書くのか、表記が統一されていないのもいただけません。

《第4段落・ある生徒の訳》

ヨニアにとって最も深刻な問題は、王が手持ちの金以上に浪費することではなく、万人に禁じられていることを王だけに許可していることでもなく、禁止すべきでないことまで禁じているということでもない。そうではなく、この国にとって最も危険なのは王国を永久に偉大な国にするための王の様々な思いつきだった。アルフォンセは臣下のことはさしおいて、国益のためとして、骨身を惜しまず強権を振るった。

第1文は少々長くて訳しづらいです。「最悪の問題は、Aではないし、BでもCでもない」という構造を読みとることはたやすいのですが、ここで大切なのが同語反復の効果です。試しに、この英文を声を出して読んでみてください。音読すると、それまで見えなかったものが見えてくることがあります。後半が対句のような形式になっていて、しかも permit と forbid という反対語が2度ずつ使われているので、リズムカルでありながら、ちょっと舌を噛みそうな感じがしませんか。実はこのような同語反復が見られるのはここだけではなく、最終段落でもよく似た形が登場します。だとしたら、これは書き手が意図的に仕組んだと考えてよく、2度ずつ出てくる permit と forbid を同じ語で訳さないとこれに近い効果は得られません。そして、ここを忠実に訳し出すことが、最終段落の「落ち」を引き立たせるのです。

第2文は、前の文で「～ない」がつづいているために、「そうではなく」がうるさく感じられます。これは削ってしまってもかまいません。また、読点がなく読みづらいので、「危険なのは」のあとに入れるといいでしょう。

第3文は、この訳文では何が言いたいのかよくわかりません。carry a big stick が「強権を振るう」というのは正しいですが、spare や not to speak of の意味をつかめていないようです。

spare は、ここでは「～を免れさせる」「～に苦勞をかけない」の意で、not to speak of は「～は言うまでもなく」「～はもちろん」。国の利益のために、臣下をこき使うのは当然のことだが、アルフォンスは自分自身の勞をも惜しまないと言っているのです。自分自身をもきびしく律するというのは、献身的な名君のようにも感じられますが、この国ではちょっと事情がちがうということが以下の段落に書かれています。

《第5段落・ある生徒の訳》

若い王が月曜日にあることを思いつくと、火曜日にはそれが法となった。水曜日には法が施行され、さらに木曜日になると多数の犯罪者があちこちで逃げ出すことになった。

ここは事実が淡々と記されているので、よけいな説明を加えずに簡潔に訳すこと。第1文の主語が「若い王」になっていますが、アルフォンスと同一人物であることがややわかりにくいので、「この若い王」や「その若い王」のほうがいいでしょう。

第2文の最後は、the heads of lawbreakers were flying right and left をそのまま「違反者たちの首が左右に飛んだ」と訳せば、原文の小気味よいリズムを生かすことができ、ブラックユーモアのきいた切れのよい文になるのですが、どうもここは生徒訳のように考えすぎて意味を取りちがえる人や、説明的にことばを加えておもしろみのまったくない訳文にしてしまう人が多いようです。「多くの違反者が国じゅうで罰せられた」では、この国が世界最悪であるという恐ろしさがまったく伝わりませんし、「違反者たちの首がつぎつぎに飛ぶ騒ぎになった」などの訳は、まちがいでないものの、「騒ぎになった」とワンクッションを入れることによって、原文の持つ生々しさがぼやけてしまいます。

《第6段落・ある生徒の訳》

一、二ヶ月経つとどういうわけかその新しい法律は徐々に忘れ去られていくのだが、その頃にはさらなる新しい法が公布されていた。「必要なのは法だけ、犯罪者がいなくなることは決してない」とは、ヨニアではよく言われることだった。

第1文は、大きなミスはありませんが、somehow を「どういうわけか」と機械的に訳すと、あたかも理由があるのが当然のように感じられ、本文の意図しない方向へ読者の思考が向かっていくので、「なんとなく」「いつの間にか」ぐらいがいいでしょう。「いくぶん」という訳もときどき見かけますが、fade away をそんなふうに弱めているわけではありません。"would have been ～" は仮定法ではなく、「過去の習慣」の意味の would に完了形がついただけです。同じ would が前の行にも出てきますね。もうひとつ、law の訳語が「法律」になったり「法」になったりというのは好ましくありません。

第2文は、「犯罪者がいなくなることは決してない」というのが、まちがいでないものの、正真正銘の悪人が多いという意味にとられかねないので、「きびしい法律が多くの違反者を生む」というニュアンスの伝わる訳文を作りたいものです。

《第7段落・ある生徒の訳》

もちろん、計画をたてるときに王が誰かの助言に耳を傾けることは一切なかった。確かに、王の御付には複数の相談役と哲人がいた。けれどもヨニアでは、王の考えをただ聞くだけで相談役の称号が、王が話すたびに思慮深くうなずくだけで哲人の称号が、それぞれ与えられていたのだ。

最終段落がなかなかむずかしい。第1文は特に大きな問題がありませんが、第2文と第3文のおもしろさを忠実に伝えるのは至難の業です。

第4段落第1文の説明でも書いたとおり、ここでも **counsel** と **sage** という2語がそれぞれ繰り返されていることに注意してください。第3文には、ずいぶん突飛でばかばかしいことがさりげなく、おもしろおかしく書かれています。それを多少とも伝えるには、複数回出てくる **counsel** と **sage** に同じ訳語を与える必要がどうしてもあります。生徒訳は、とりあえず英文の意味は正しくとらえています。同語反復ができていないので「落ち」のおもしろさが半減しています。

もっとも、それ以前に **listening to the king's counsel** の意味をつかめない人も多いようです。ここは、**counsellor** というのは本来助言を与える人のことなのに、この国では王から助言を受ける人を **counsellor** と呼ぶと言っているのです。この珍妙な用語法を訳文で伝えるためには、「相談」「相談役」という訳語では、立場が逆転することがわかりにくい。「助言」「助言者」を使えば、「ヨニアでは、助言者とは国王の助言を聞く者をさす」などという訳文を作れますが、「助言者」というのはあまり肩書きらしくないので、わたしは「指南」「指南役」という訳語をあてています。

sage のほうは「賢人」「賢そうに」などと処理すればいいでしょう。**earned their title** は「称号が与えられる」でも悪くありませんが、「～と呼ばれている」ぐらいでじゅうぶんです。

最後の一文では、英文の表現効果までを正確に汲みとる読解力と、その効果と同様のものを日本語で伝えていく発想の豊かさが同時に求められています。

【訳例】

ある日、世界科学会議が、わたしにある使命を果たさせるために、タイムマシンMV20164によって某小国の過去へ派遣した。わたしには、その国の名前も場所も明かす権利がない。だから、仮にヨーニア国と呼ぶことにする。ヨーニア国の首相が救済を熱望したため、要請に応じてわたしが送りこまれた。

しかし、到着するとすぐ、ヨーニアを助けることなどだれにもできないとわかった。原因はそこを統治する国王にあったのだが、その名を明かすことも禁じられている。仮に、アルフォンスと呼ぶことにしよう。

そして、アルフォンスの実像について説明を求められるなら、世界一富める国をも世界一貧しい国に変えてしまう男だという答え方ができる。

ヨーニアの最悪の問題は、国王の金づかいが荒すぎて負債が生まれるといったことではないし、国王がだれにも許すまじきことを自分に許したり、だれにも禁じるべきではないことを人に対して禁じたりといったことでもなかった。何より危険なのは、この国を永遠の強国にのしあげるための方法についての、国王の考え方であった。アルフォンスは、ヨーニアの利益のために、臣民の労はもちろん、自分の労もいとわず、強権を発動した。

この若い国王が月曜に何かを思いつくと、火曜にはそれが法律になった。水曜にはその法律が施行され、木曜には違反者たちの首が左右に飛んだ。

一、二か月たつと、その新しい法律はいつの間にか消滅したが、そのころには別の新しい法律が公布されていた。ヨーニアでは、「必要なのは法律だけで、違反者には事欠かない」とよく言われた。

もちろん、国王は立案に際して、だれにも相談しなかった。たしかに、国王のまわりには、指南役や賢人がおおぜいいた。だがヨーニアでは、指南役とは、国王の指南を受ける人々のことであり、賢人とは、国王が話すたびに賢そうにうなづく人々のことだった。

【リーディングとは】

リーディングとは、海外の本を日本で翻訳出版するかどうかを検討するために、それを読みこんで資料をまとめる作業です。その資料をシノプシス（またはレジュメ）と呼びます。

翻訳者や翻訳学習者がシノプシスを書くのは、出版社から依頼される、著作権エージェントから依頼される、自主的に書いて出版社や著作権エージェントに持ちこむ、などの場合が考えられます。それぞれの詳細については各自で調べてもらいたいのですが、シノプシスは洋書を翻訳出版するかどうかを決めるための最も重要な資料なので、その作成は大きな責任をとまなう仕事であり、翻訳の仕事そのものに劣らないほどです。

翻訳学校などでリーディングの講座をおこなっても、面倒に感じる人が多いのか、翻訳そのもののクラスに比べて生徒が集まらないのが実情です。しかし、原書を最後まで読んであらすじをまとめ、なるべく客観的な評価をするというトレーニングは、翻訳の基礎体力をつけるという意味でも文章修業という意味でもきわめて効果的なので、ぜひ定期的に取り組んでください。

いずれ出版翻訳の仕事をしたと考えているなら、リーディングの作業を避けて通ることはできません。上手なシノプシスの書き方を身につけておくと、仕事の機会が格段に増えるので、早いうちにマスターしてください。

【シノプシス作成で気をつけるべき点】

一般にフィクションのシノプシスは、(1)作品の基本情報(作者名、ページ数、受賞歴など)、(2)あらすじ、(3)リーダーによる概評、の3要素から成り立ちます。そのほかに、登場人物表をつけたり、最初のほうに数行の紹介をつけたりする場合があります。くわしくはあとに載せた2作の実例を参考にしてください。

ここではまず、リーディングの作業を進めていく際に注意すべきことを箇条書きでまとめてみました。

《原書を読みながらメモをとるとき》

- ・メモをするかどうか迷ったら、とりあえずメモしておく。あとからいくらでも削れる。
- ・あらすじのメモをとりながら、同時に登場人物表も作成する。名前がついている登場人物なら、いったん全員メモしておく。
- ・新しい登場人物には印をつけるなどして、あとで見つけやすいようにする。
- ・あらすじと直接関係なくても、物語を理解するうえで重要と思われる情報は必要に応じて別にメモをとっておく(登場人物のプロフィール、物語の特徴がよく表れている個所、感動した個所など)。

《シノプシスを作成するとき》

〈基本情報〉

- ・作品名、作者名、版元、刊行年、ISBN、ページ数など、どこまでの情報を載せるかに決まりはない。仮題は特につける必要なし。訳出した際の予想枚数(400字詰め原稿用紙換算)を書いておくと親切。

〈あらすじ〉

- ・複数視点の場合や、物語の構成に特徴がある場合など、あらすじを読むうえで事前に知っておいたほうがよい点があれば、あらすじの前に記載する。
- ・事実を客観的に、明確に書く。主観によるよけいな情報は加えない。
- ・完全に時系列どおりに書く必要はないが、入れ替えすぎたり、まとめすぎたりするのもよくない。
- ・登場人物表をつけた場合も、なるべく人物表を見返さなくても読み進められるように、本文に情報を補って書く。
- ・適度に段落を分け、見やすい、読みやすい文章を心がける。
- ・あらすじのなかで伏線はきちんと回収できているか、謎は解決されているかを確認する。

〈概評〉

- ・何人称であるとか、視点人物についてなど、基本情報は先に書く。
- ・長所と短所の両面から、客観的に評価する。
- ・だめなものはだめ、つまらないものはつまらない、と自信を持ってはっきり書く。もちろん、

その根拠は明確に。

- ・同一ジャンルの他作品と比較し、相違点を書くと伝わりやすい。
- ・日本の読者に受け入れられるかどうか、どんな読者層に向いているかなど、市場を意識して書く。

次ページから、シノプシスの実例を紹介します。

1 番目は、最終的に『父さんが言いたかったこと』（ロナルド・アンソニー著、新潮社）というタイトルで刊行されたものです。原題は *The Forever Year* ですが、このシノプシスを書いたときはまだ本になる前の原稿で、*The Story* という仮題しかついていませんでした。残念ながら、これは原著、訳書ともすでに絶版になっています。

2 番目は『チューダー王朝弁護士シャードレイク』（C・J・サンソム著、集英社文庫）で、原題は *Dissoluton*。こちらはシリーズ物の第1作で、2014年4月の時点で、第2作『暗き炎』（原題 *Dark Fire*）までが出版され、第3作 *Sovereign* の翻訳刊行も決まっています。

2作とも出版社からの依頼で読み、非常におもしろいと思った作品なので、好意的な書き方をしていますが、これまでおこなってきたリーディングの仕事のなかには、つまらないから翻訳出版すべきではないと進言したものもたくさんあります(たぶんそちらのほうが多いでしょう)。なんでも褒めればよい、というものではないので、そこはどうか勘ちがいしないでください。つまらないものははっきりつまらないと書くほうが、長い目で見れば依頼者から信頼されます。

このあとに載せたシノプシスは縦書きですが、いまは横書きのシノプシスを作成する人もずいぶんいます。実際の仕事では、依頼者がどちらの形式を望んでいるかを先に確認するといいいでしょう。

なお、シノプシスはその作品がおもしろいかどうかを検討するための資料ですから、当然ながら「ネタバレ」はあります。次ページからのシノプシスを読むにあたって、『父さんが言いたかったこと』と『チューダー王朝弁護士シャードレイク』を未読の人は、その点をご了承ください。

【『父さんが言いたかったこと』シノプシス】

作品名 The Story

著者 Ronald Anthony

ブルーフ原稿三七一ページ。訳出すると七百枚程度か。

〈概要〉

妻に先立たれた八十三歳の老人が、三十二歳である末の息子と同居をはじめめる。交際の女性との結婚に踏みきれぬ息子に、父は若き日にある女性と愛し合った話を打ち明ける。それがきっかけとなって、息子の結婚観や仕事に向かう態度が少しずつ変化していく。

〈主要登場人物〉

ミッキー・シェンナ 八十三歳 もと株式仲買人

ジェス ミッキーの次男 三十二歳 フリーランスの雑誌記者

ドロシー ミッキーの死んだ妻 ミッキーより八歳年下

テリーサ ミッキーの妹 七十八歳

ダーリーン ミッキーの長女 五十二歳

マシュー ミッキーの長男 五十歳

デニス ミッキーの次女 四十四歳

ブラッド デニスの夫

マリーナ ジェスの恋人 小学校の教師

ジーナ ミッキーの若き日の恋人

〈あらすじ〉

八十三歳のミッキー・シェンナはニュージャージー在住のイタリア系二世。五十年連れ添った妻ドロシーに一年前に先立たれ、ひとりで暮らしている。ミッキーはある日ぼやを出してしまい、それを機に、四人の子供たちが集まって、父の面倒をこの先どうやって見るべきかを話し合う。年長の三人はケア付き住宅に入れようと主張するが、雑誌のフリー記者である末の息子ジェスは、自分と同居させればいいと言い張り、兄や姉の反対を押しきって、ミッキーとのふたり暮らしをはじめめる。

ジェスは歳の離れた父ミッキーとあまり深くかわったことがなく、子供のころから兄や姉をうらやましく思っていた。父と心をかよい合わせたくて同居をはじめたが、すぐに新生活に

幻滅する。生活習慣のちがいは大きいし、父が何かと些細なことに口出しをしてくるのもうっとうしい。

ジェスは二十代のころに何人かの女性と付き合ったが、若気の至りで、どの相手とも長つづきしなかった。いまの恋人である小学校教師マリリーナとは、付き合いはじめて半年になる。これまでで最も深く理解し合った相手であり、相性も最高だと思うが、互いに自由な関係を望んでいるため、結婚しようという話にはならない。ミッキーがマリリーナと引き合わせると言うので、ジェスはしぶしぶ承諾する。

意外にも、ミッキーとマリリーナは意気投合する。マリリーナが帰ったあと、ミッキーはジェスに、将来結婚するつもりかどうかを尋ねる。はつきり返事をしないジェスに、ミッキーは不満げな顔を見せる。

それから数日後、ミッキーはジェスを呼びつけ、大事な話があるから聞けと言う。ジェスの母と出会う前に付き合った女性の話らしい。仕事人間でロマンスのたぐいとは無縁に見えた父が急にそんなことを言い出したので、ジェスは驚くが、とにかく耳を傾ける。

一九四七年、マンハッタン。二十代後半のミッキーは金融業に転職したばかりで、充実した日々を送っていた。ある日、友人の主催するパーティーで、その妹である大学生ジーナに会い、たちまちその魅力の虜になった。ジーナは美女であるだけでなく、教養も向上心も並外れていて、マスコミや政治の世界にかかわることをめざしていた。つぎの週末にはじめてデートをしたふたりは、その夜は額にキスしただけで別れた。

ミッキーはそこまで語ったところで、疲れたからと言って話をやめてしまう。それ以後、数日おきに、父は息子にジーナの話をかせるが、なかなか結末にたどり着かない。つぎのデートのあとで唇を重ねたこと、何度か会ったのちにととうとうベッドをともにしたこと、ふたりでヨーロッパへ旅行したこと。そして、婚約指輪を渡したことを。

父は最終的に母と結婚したわけだから、ジーナとの思い出話がいかに甘美であろうと、行き着く先は見えている。愛し合いながらも、結局連れ添うことのなかったカップルの話を聞かされつづけた数か月のあいだ、ジェスは心のなかで自問自答を繰り返す。マリリーナとの関係をどうすべきなのか。結婚せずによきパートナーでありつづけるとはどういうことなのか。心の迷いに微妙に影響されてか、マリリーナとの仲は少しずつ気まづくなっていき、やがて大げんかをして絶交状態になる。

一方、その期間に、ジェスの仕事は順調に進んでいく。気むずかしいと言われる有名人の取材では、恐れずに自分をさらけ出したのが功を奏して、相手に気に入られ、さらに別の有名人を紹介してもらう。姉の夫が新たに雑誌専門の出版社を立ちあげたときも、相性がぴったりの編集者を紹介することができたし、自分の望む企画も実現しそうだ。取材にも記事の執筆にも、

自信を持って望めるようになった。

ジェスはマリナーと別れたことをミッキーに隠しとおそうとするが、詰問されてとうとう打ち明ける。なぜだと問われたジェスは、父さんのせいだ、結局別れることになるふたりのくだらない恋の成り行きを延々と語られて、男女の愛というものに幻滅してしまったからだと言い、ミッキーをなじる。ミッキーはさげすむような目で息子を見る。

その夜、ミッキーは脳卒中で倒れて意識不明になる。ミッキーの妹テリーサが病院に現れたとき、ジェスはジーナのことを尋ねてみる。テリーサによると、ジーナは婚約直後に死んだとのことだった。ニューヨークの市長付きスタッフに採用され、市のかかえている問題の実情を知るべく、ブロンクスの治安の悪い地区に単身乗りこみ、夫婦げんかをとめようと割ってはいって、刺されてしまったという。ミッキーは数年間立ちなおれなかったが、その傷をジェスの母がゆっくり年月をかけて癒していった。ミッキーは妻を生涯愛しつつも、ジーナのことを忘れてはいなかったのだ。

数日後、ミッキーは息を引きとる。ジェスは、ミッキーが何を伝えようとしていたかを考える。この世には不滅の愛もありうる、だから自信を持って、ということだろう。

ミッキーの死の知らせを聞いたマリナーが、ジェスのもとに現れる。ジェスはマリナーに、堂々と愛を伝える。もはや、心に迷いはない。

〈概評〉

第一章が父を視点人物に据えた三人称の語り、第二章が息子による一人称の語り。以下、章ごとに、交互に近い形で視点が入れ替わる。技巧的と言えるのはそのような構成になっていることぐらいで、あとはひたすら直球勝負、タイトルそのままのシンプルな愛の物語だ。そして、シンプルだからこそ、圧倒的なドライブで読ませる。

あらずじにこみ入った部分はなく、父が語る昔話にしても、大きなひねりや驚愕の結末が用意されているわけではない。にもかかわらず、少なくとも後半については、まちがいにペーギターナーだ。それは、脇役まで含めて、ひとりひとりの人物造形がしっかりしているからだ。また、息子による内省的な語りにも魅力がある。ほんの少しだけ持ってまわった語り口がなんとも心地よい。

難を言えば、父の告白がはじまるあたり（全体の三分の一ぐらいのところ）までがいささか冗長であることだが、読み進めるうちにそんなことは忘れてしまう。

下世話な言い方をすれば、「癒し系」の秀作である。これは二十歳以上の全世代の男女に受ける可能性を秘めた作品だと思う。読んでいくうち、だれもがどこかで自分の来し方を振り返り、感慨にふけるのではないだろうか。

『「チューダー王朝弁護士シャーードレイク」シノプシス』

タイトル Dissolution
作者 C. J. Sansom
出版年 二〇〇三年
出版社 Macmillan
ページ数 四四三ページ（ペーパーバック版）訳出すると千枚程度。

【概要】

舞台は一五三七年のイングランド。修道院がつぎつぎと解散されていくなか、国王の命を受けた監督官が派遣先の修道院で何者かに首を斬り落とされて殺害された。国王の腹心クロムウエルの命を受け、弁護士のシャーードレイクが新たな監督官として真相究明に乗り出す。イギリスで大ベストセラーとなった歴史ミステリー、マシュー・シャーードレイク・シリーズ第一作。

【おもな登場人物】

マシュー・シャーードレイク ： 弁護士、監督官
マーク・ポア ： シャードレイクの助手
トマス・クロムウエル ： 宗務長官
ロビン・シングルトン ： 前監督官
ギルバート・コピンジャー ： 治安判事
フエビアン ： 修道院長
モーティマス ： 副院長
ゲイブリエル ： 聖具係兼聖歌隊長
エドウィグ ： 出納係
ガイ ： 施療係
アリス・フューテラー ： 施療係助手
オーファン ： 元施療係助手
サイモン・ウエルプレイ ： 修道士見習い
ジェローム ： カルトウジオ会修道士
マーク・スミートン ： 宮廷楽士

【あらすじ】（全編を通して主人公シャーードレイクの一人称で語られる）

一五三七年のイングランドでは、ヘンリー八世の治下、宗教改革の一環として多くの修道院が解散させられていた。そんななか、スカンシアの聖ドナトウス大修道院へ明け渡し交渉のために派遣されていた監督官のシングルトンが殺害された。改革派の弁護士シャーードレイクは、王の腹心クロムウエルから、殺人事件の解明と明け渡し交渉の続行を命じられ、同居する青年マークを助手としてともなうて、修道院へ赴く。

シングルトンは、院の厨房で首を斬り落とされた死体となって、早朝に発見されていた。同じころ、首

を掻き切られた鶏の死骸が聖堂の祭壇に置かれ、”改悛した盗人の手”と呼ばれる聖遺物がなくなっていた。

シングルトンがその修道院を訪れた真の目的を知っていたのは、五人の幹部修道士——院長のフェビアン、副院長のモーティマス、聖具係兼聖歌隊長のゲイブリエル、出納係のエドウィグ、施療係のガイ——だけだった。修道士たちは外部の犯行だと口をそろえたが、殺害現場となった厨房でシングルトンがだれかと待ち合わせていたことや、そこは夜間は施錠されていることなどから、内部の犯行の可能性が高かった。

調査のあいだ、シャードレイクとマークは、施療係のガイの世話を受けることになった。ガイのもとで助手として働いているアリスのしつかりとした気性にシャードレイクは好感をいだくが、マークも同じ気持ちのようだった。若く見た目のよいマークに、シャードレイクはほのかな嫉妬を覚える。

見習い修道士のウエルプレイが、モーティマスによるきびしい懲罰を受けたすえに昏倒した。うわごとで、以前にもこの修道院で人が殺されたと言い残し、発作を起こして絶命する。ガイによる見聞の結果、何者かに毒殺されたことがわかった。犯行の機会があつたのは、例の五人の幹部修道士だった。

シャードレイクはスカンシアの町へ出かけて、治安判事から話を聞く。修道院所有の土地がひそかに安価で売却されているという噂があるが、証拠はつかめていないという。また、かつて修道院の施療係の助手をしていた、町の救貧院出身のオーファンという娘が二年前に行方不明になり、修道院から金杯を盗んで逃げたとされていることを知った。

修道院へもどったシャードレイクは、シングルトンを公然と罵ったというカルトウジオ修道会の老修道士ジェロームと話をする。亡きジェーン王妃の遠縁にあたる人物だったが、その奇妙な言動から正気を失っているとされていた。ジェロームは、かつて拷問で王への忠誠を誓わされ、その際に目の前で指示を出していたのはクロムエルだったと語る。そして、そのとき隣の監房にいたマーク・スミートンという青年もまた、拷問によつて当時の王妃アン・ブーリンの愛人であると虚偽の自白をさせられて処刑された、とも言った。シャードレイクはクロムエルへの忠誠心からこの話を信じようとしなかったが、助手のマークは欺瞞に満ちた宗教改革にいつそう不信の念を強めていった。

池の搜索をしたところ、立派な剣と、ゲイブリエルの修道服、そしてかなり前に遺棄されたらしい若い女の死体が見つかった。首の骨を折られていた。コピンジャー判事の話にあつたオーファンだと思われるが、実際には行方をくらませたのではなく、何者かに殺されていたことになる。

ゲイブリエルの修道服は、シングルトンが殺される数日前に洗濯場から盗まれたものだった。また、生前ウエルプレイとオーファンは親しく、オーファンは何人かの修道士から言い寄られて困っているとウエルプレイに相談していたことがわかった。その修道士のなかにはモーティマスとエドウィグも含まれていた。

シャードレイクはアリスから、シングルトンが入手していたという裏帳簿の存在を知らされていたため、エドウィグの執務室へ忍びこんでそれを手に入れた。たしかに、秘密裏に土地が売却されていた。シングルトンがこの事実を嗅ぎつけていたのなら、エドウィグが殺害した動機にはなるが、事件当夜のエドウィグは院を離れていて、アリバイがあった。

シャードレイクとマークは、調査の過程で、自分たちの部屋から厨房へつづく古い通路を発見する。最近作られたのぞき穴にあった痕跡から、同性愛者であるゲイブリエルが潜入していたと考えられた。聖堂でゲイブリエルを問いつめると、のぞきは認めたものの、一連の殺人については無実だと訴えた。その後、シャードレイクの頭上から聖像が落下し、とっさにかばったゲイブリエルはその下敷きになって即死する。シャードレイクとマークは犯人らしき人影を追うが、逃げられてしまう。

シャードレイクはクロムウエルに事態の変化を報告するため、そして池で見つかった剣を作った人物を突きとめるために、マークを残して単身ロンドンへ帰る。調べたところ、剣の作者はアン・ブーリンの愛人として処刑された宮廷楽士マーク・スミートンの父親だった。しかし、その父親はすでに病死していた。

クロムウエルに調査の経過を報告すると、クロムウエルは、スミートンとアン・ブーリンの愛人関係は仕立てあげられたもので、それをシングルトンに命じたのは自分だと悪びれもせず認めた。ジェロームの話は真実だったことになる。シングルトン殺害はスミートンの縁者による仇討ちなのだろうか。シャードレイクは突然事件の真相に思いあたり、処刑前夜にスミートンに面会した人物についてロンドン塔へ問い合わせた。

修道院へもどると、ジェロームが行方不明になっていた。そして、ロンドン塔の看守から面会人の特徴を記した手紙が届く。その人物の風貌はアリスそのものだった。シャードレイクはアリスに、彼女こそがシングルトンを殺した犯人だと告げる。アリスはスミートンの従妹で、恋人だった。母親が引きとった剣でシングルトンを処刑することによって、愛する人の仇を討ったのだ。アリスは情報提供者を装ってシングルトンを厨房に呼び出したあと、盗んだ修道服をまとうて犯行に及んだ。鍵がなくても厨房へはいれる通路の存在は知っていたし、剣の使い方はスミートンの父親から手ほどきを受けていたという。首をはねた鶏を祭壇に置いたのは捜査を攪乱するためだった。

アリスの告白を聞いているところへ、背後からナイフを突きつけられた。以前からアリスと恋仲になっていたマークがそこにいた。すでにアリスから真相を打ち明けられていたマークは、ふたりで国外へ逃げるつもりでいた。シャードレイクは、エドウィグこそがほかの三人を殺した犯人だと告げ、捕らえるのに力を貸してくれと説得を試みる。だが、ふたりはシャードレイクを戸棚に閉じこめ、この悪天候のなかで沼地を渡るのは無謀だという制止も振りきって出ていった。

朝になり、ガイに発見されると、シャードレイクは一部始終を語った。おそらくエドウィグは、オーフアンに言い寄ってもなびかないことに逆上して殺害し、そのいきさつを知っていたウエルプレイの口を封じたうえ、核心に近づきつつあったシャードレイク自身をも殺そうとしたのだろう。不当な土地売却によって貯めこんだ金を持って、逃亡するつもりでいるにちがいない。

マークとアリスを探して沼地へ行くと、ふたりぶんの足跡が雪解け水のあふれる一帯へと消えていて、ふたりが生きて沼地を渡れたとはとうてい思えなかった。そのころ聖堂では、改悛した盗人の手とともに身を隠していたジエロームが発見された。聖遺物は盗まれたのではなく、国王の手から守ろうと、事件当夜の混乱に乗じてジエロームが隠していたのだった。頭上から金貨が落ちてきて、シャードレイクはエドウィグを見つける。鐘楼の修復作業をする吊りかごのなかに金を隠していたらしい。三人の殺害について認めたエドウィグは逃亡を図るが、シャードレイクと格闘のすえ、鐘楼から落下して命を落とす。

三か月後。すでに修道院は閉鎖され、土地は国に没収されていた。撤去作業を監督するためにこの地にもどったシャードレイクは、ガイと再会した。ガイはシャードレイクに一通の手紙を見せた。フランスでマークと結婚したというアリスからの手紙だった。

【概評】

イギリスの作家C・J・サンソムのデビュー作であり、シャードレイク・シリーズの第一作でもある本書は、十六世紀のイングランドを舞台にした歴史ミステリーである。二〇〇三年のCWA(英国推理作家協会)ジョン・クリーシー・ダガー(新人賞)、およびCWAエリス・ピーターズ・ヒストリカル・ダガー(最もすぐれた歴史ミステリーに贈られる賞)両賞の候補作に選ばれた。

ヘンリー八世が教皇からの独立を宣言した英国宗教会における大きな転換期の出来事が、トマス・クロムエルやマーク・スミートンなど歴史上の人物を登場させながら、架空の主人公の一人称一視点で語られていく。同じ修道院物のミステリーと比べるなら、ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』ほど哲学的、思想的な色合いは強くないが、エリス・ピーターズのカドフェル・シリーズよりはいくらか重厚と言えるだろう。

ミステリーとしては、そこかしこにいいねいに配された伏線が最後にしっかりと収斂され、手堅くまとめられている印象を受ける。エドウィグを犯人だと推理した根拠の弱さなど、詰めも甘さも感じられるものの、ばらばらのように思えた手がかりが、犯人がふたりいるという種明かしによって解明されていくところは読んでいて心地よい。

そして、本書のいちばんの魅力は、時代に翻弄される人々が活写されているところだろう。とりわけ主人公の造型が秀逸で、反体制の英雄などのわざとらしい大仰さはなく、マークへの嫉妬心に苛まれたり、盲信していた改革の正義がしだいに揺らいでとまどうところなど、歴史の奔流に揉まれる等身大の人間として描かれている点が興味深い。また、五人の幹部修道士をはじめ、末端の登場人物までがしっかりと書き分けられている。それぞれが社会や信仰に対する考えをはっきりと表明しているため、宗教改革がさまざまな立場の人間にどんな影響を及ぼしたのかを、読者はいろいろな角度から考えることができる。

当時の思想、文化、風俗などを垣間見ることができるともおもしろい。スカンシアで暮らす人々の貧しさ、シャードレイクの障碍やガイの肌の色への差別と偏見、ゲイブリエルのひそかな欲望、マーク・スミートンやジエロームへの拷問など、抑圧の時代を象徴するひとつひとつの要素が人間の生と本能のあり方を赤裸々に浮かびあがらせている。

惜しむらくは、物語全体にわたってさほど緩急がなく、エンターテインメント性を重視する読者を結

未まで牽引する力がいくらか不足しているところだろうか。また、歴史ミステリーに付き物の問題ではあるが、時代的な背景に関して日本人読者には少々わかりづらいところがあるかもしれないので、あとがきなどで補足する必要があるだろう。

著者のC・J・サンソムは、大学で歴史を学んだのち、いくつかの職を経て事務弁護士となり、のちに作家に転身した。著作は、ノンシリーズの“Winter in Madrid”以外はすべてシャーードレイク・シリーズで、本作以降も“Dark Fire”(二〇〇五年CWAエリス・ピーターズ・ヒストリカル・ダガー賞受賞)、“Sovereign”、“Revelation”、“Heartstone”などがある。